

派遣者番号	R5K25	氏名	材木 優佳
研究主題 —副主題—	児童の思考を活性化させるための問いと対話活動を取り入れた授業づくり — 言葉のもつよさを意識した指導を通して —		
派遣先大学	早稲田大学大学院	指導担当者	遠藤 真司
所属	国分寺市立第五小学校	所属長	橋本 弥記

キーワード： 国語科授業 文学的作品 問いづくり 対話活動 言葉のもつよさ 思考の活性化

**要旨：** 本研究は、小学校国語科の授業で「言葉のもつ力」を重視し、児童が自ら問いを立て、文学作品を読み解くことで、思考を活性化させることを目的としている。児童が、対話活動を通して、自分の考えを整理し、表現する喜びを体験できるように指導の工夫をした。具体的には、意図的な3人組の学習、サイコロトークなどの言語活動、作者や物語の世界観に浸るための読書活動などがある。児童が積極的に参加し、学習する楽しさを感じられるようにした。また、作者がどんな人物であるかを児童が知ることで、文学作品の理解を深め、学習意欲の向上につながるよう教材を開発した。児童への質問紙調査の分析の結果、「問いづくり」「対話活動」「言語活動」「読書活動」を実施することにより、学習意欲が向上し、思考の活性化の可能性が示された。また、生涯にわたって読書を楽しむための基礎となる考え方や、問いの解決に至るまでの指導に関して課題が確認された。

# 児童の思考を活性化させるための問いと対話活動を取り入れた授業づくり

## — 言葉のもつよさを意識した指導を通して —

材木 優佳

### 1. 課題設定の理由・背景

平成29・30年告示の小学校学習指導要領【国語編】では「言葉のもつよさ」、中学校・高等学校学習指導要領【国語編】では「言葉がもつ価値」という形で発達段階にあった目標が明記されている。言語能力の重要性については、中央教育審議会初等中等教育分科会の「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」において、「知的活動、感性・情緒、コミュニケーション能力の基盤として、生涯を通じて個人の自己形成に関わるとともに、文化の継承や創造に大きく寄与するものである。」と示されている。そして、「言葉は、学校という場において子どもが行う学習活動を支える重要な役割を果たすものであり、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となるものである。学校における学びの質や、教育課程全体における資質・能力の育成の在り方に関わる重要な課題である。」と記している。

また、ジョンストン(2018)は、「言葉を身につけ、学習するということは、それ自体を目的とするのではなく、何かをなすために使われるもの」としている。自分の考えが正確に伝わるように言葉を選ぶことは何かをなすために必要不可欠である。

小学校の学級担任として、児童の話合い活動に携わる中で、相手を意識した話し方や聞き方の基本を身に付けることは重要であると考えている。家族の中での対話と、学校の中での対話は異なる。家族であれば、関係上、言わなくても気持ちを汲んでもらえることが、学校の友達だと、トラブルになったり、誤解が生まれたりするということは、よくある。そこで、様々な本に触れ、自分の考えや感情を正確に相手に伝える術として言葉のもつよさに気付き、選んで使ってほしいという筆者の願いがある。以上のことから、「言葉のもつよさ」を意識しながら「対話活動」というコミュニケーションを通して、学習を深められる授業づくりを課題として設定した。

また、国語の授業で文学的な作品を読むことの意義の一つに、「生涯を通じて、読書を楽しむための素地を育むこと」があると考えている。生涯にわたり、読書を楽しむ力を身に付けるためには、国語の授業の中で読むことを楽しみ、思考を活性化することが必要である。

この点について、加藤(2019)は、「探究」するためには、「探究」に堪え得る課題の設定が必要であり、学習者が「探究」してみたいと思わせるような魅力がなくてはならないとしている。そのために、学習者自らが「問い」を立て、探究していくことを課題とした。

### 2. 実践対象学級の状況

実践の対象校は、現任校とは異なる都内公立小学校である。授業を実践するにあたり、新規のファシリテーターとして思考を深める在り方を検討したいと考え、他校での実習とした。本校は、2学級ずつの6学年で全12学級である。令和2年度から国語科を軸とした授業の実践を行っている。どの学年・学級にも、国語の研究に関する掲示があり、学びの軌跡が常に振り返られるようになっていた。

担当する第6学年は、素直で何事にも真面目に取り組むことができる児童である。全校で取り組む地域との連携行事に向けて、積極的に自分の役割を果たそうとしたり、低学年の面倒を見たりと、準備をする姿が見られた。学習の様子については、担任から「コロナ禍の影響もあり、グループで向かい合って話し合い活動をする経験がなかったことに加え、発言や対話することに対して苦手意識があるため、対話活動に焦点化した今回の授業は難しくなることが予想される。」と話があった。また、「もっと活発に対話活動ができるようになってほしい。」「語彙の数を増やしたい。」という担任の願いもあった。

### 3. 実践の目的

児童自らが「問い」を立て、文学的作品を読み進める中で「言葉のもつよさ」に気付き、「対話活動」を通して思考を活性化させ、自分の考えを整理したりまとめたりする楽しさが味わえるような授業づくりを行うことを目的とした。

### 4. 実践の方法及び成果の検証方法

実践の方法として、「問い」づくりに関して、遠藤(2021)は、「国語科における『一貫した問い』の有効性」について記している。「『一貫した問い』とは、授業につながりをもたらし、常に子どもたちに主題を考

えさせて深い読みをさせていく学習指導法である。」としている。単元学習の中で、子供たちが自分で立てた問いを一貫して考え、解決していくことで、思考を活性化させたい。

「対話活動」について、伊崎（2017）は、「友達の意見を聞く中で理解力を深め、意見と理由のつながりを理解する中で論理性を高め、友達の意見と自分の意見を比較・検討・吟味することによって『自分の考え』に磨きをかけることへの期待は大きい。」とし、交流方法として「ペア・グループ学習」の実践を取り上げている。発達段階に合った「学習の進め方」を提示し、意図的なグループ編成を行うことで全員発表を保障し、「質問」「感想」「理由」「根拠」を明確にして話し合わせることにより、互いの共通点や相違点を共有し、自分の考えを構築していく。意図的なグループ編成については、児童の記述を基に、同じ考えと違う考えの児童を同じグループにしたり、似た問いを追究する児童を同じグループしたりするなど、各授業のねらいに沿って筆者が決定する。

今回の対話活動は、3人組を基本とし、全員が主体的に話す側にも聞く側にもなれるようにする。3人組に関しては、鈴木・建内（2023）は、「3人グループの対話を中心とした、読むことと話すこと [やり取り] の技能統合型の学習は、生徒の自己評価に肯定的な効果を及ぼした」としている。今回は技能統合型には触れないが、児童が、「話したい！聞きたい！」と思えるように、自分の考えをしっかりとった上で対話活動が行えるように指導計画を立て、モデル（話型）を示し、自信をもって話し合いが進められるようにする。

また、文学的な作品を扱う際には、読書活動を丁寧に行う必要がある。鎌田（2017）は、「話し合いの質、書くことの質を保障するためにも、最も重要な鍵となり基盤となる力が読書力である。読書行為を通して間接体験を増やし、先哲との対話を通して自己との対話を重ね、高い知識レベルへと自ら歩みを進めていく。」と記している。授業の中で読書活動を取り入れることにより、話し合いの質を高め、「言葉のもつよさ」に気付かせたい。そのため、学校司書と連携し、授業に関連した図書をブックトークで紹介した後、教室に置き、児童がいつでも本を手にとれるよう環境を整えて読書を推進していく。

授業中の発言がしやすい雰囲気をつくり、語彙数を増やすため、辞書を引くゲームやオノマトペゲームなどの言語活動、サイコロトークを取り入れた対話活動を行っていく。また、教室内に「言葉の宝箱」を掲示し、いつでも活用できるようにする。雨貝・園山（2015）は、「サイコロトークという状況を設定し、また細かい条件について配慮することによって、自由な発話を促す可能性がある」としている。

教材の開発としては、宮沢賢治の故郷である岩手県花巻市にある宮沢賢治記念館・イーハトーブ館・童話村を訪れ、賢治に関する資料を収集・選択・分析し、実習校の児童の実態に合わせて教材化した。ジョンストン（2018）は、「自分自身をある作品の作家だとイメージできれば、書く活動での経験を、読み手としての活動の際にも活用できるようになる」としている。作者がどのような場所で生まれ育ち、どのような思想のもとに作品を書いたのかを知ることで文学的作品を

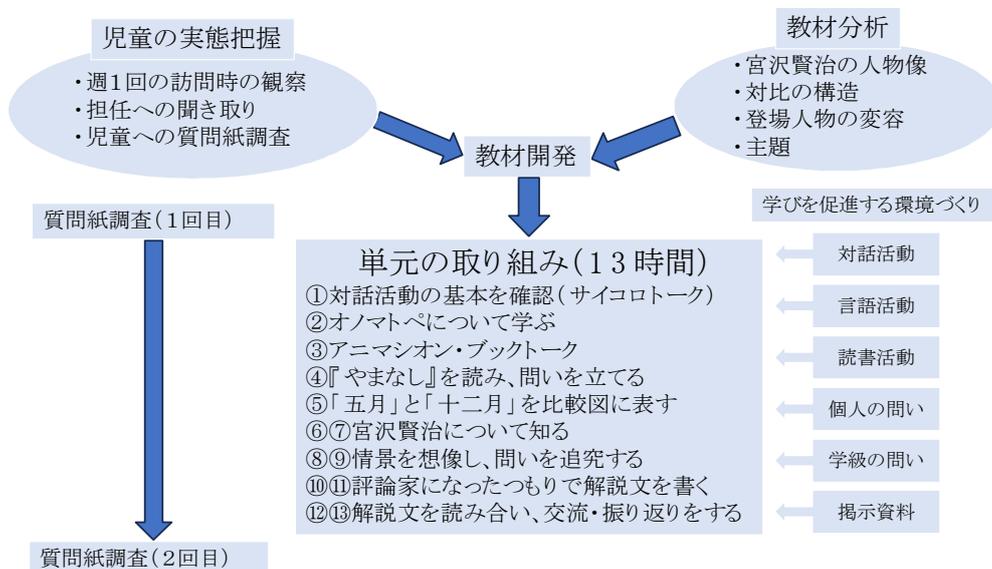


図1

読み深める手だてとなると考え、筆者が訪ねた経験も含めて、宮沢賢治の世界を視覚的に伝え、教室に掲示する。(本実践の構造については、図1を参照)

取り組みによる変化を検証するために、「授業中の児童の様子や発言、記述などを見取る」、「授業実践に関する児童への質問紙調査(表1)」、「各学級担任からのコメント」の3つの方法を検討する。質問紙調査については、事前事後に実施し、2回とも回答した児童の回答を集計し、平均値の差の検定(対応のあるt検定)をエクセル統計で行うこととした。

## 5. 実践した内容

小学校6年国語科『やまなし』の学習において、宮沢賢治による独特な表現方法を見つけて作品の世界を捉え、対話活動を通して自分の考えを確立していく授業を実施した。

### 5-1. 意図的な3人組による対話活動

1学期の実習校訪問で毎週授業を見学した際の児童の発言がとても少なかったということ、教師の発問に対する反応も薄かったことから、どのようなアプローチで対話活動を進めていくか、慎重に考える必要があった。毎時間異なる3人組を編成し、多くの児童とコミュニケーションを図り、対話活動の経験を積み重ねることで発言しやすくなるように働きかけた。今回の実践では、様々な読み方や考え方に触れられるように配慮してグループ編成を行うという意味で「意図的」とした。

上記の他に、始めのうちは、対話活動に慣れるため、仲の良い児童が同じグループになるようにし、徐々にふだんあまり話さない児童同士同じグループになるようにした。また、男女が必ず入ること、続けて同じグループになる人がいないように配慮して、筆者が毎時間のグループ編成を行った。座席表は、事前に黒板に掲示して児童があらかじめ確認できるようにしておき、すぐに移動できるようにした。

### 5-2. 物語に親しみ語彙を増やすための対話活動

実習の第1週は、児童の実態に合わせて作成した「話し合いのヒントカード」を基に、対話活動の基本事項を押さえた。また、読書活動や言語活動を通して、物語の世界や言葉に親しむ機会を設けた。

#### 5-2-1. 「サイコロトーク」による対話の促進

「サイコロトーク」とは、話題を6つ用意し、グループの中で順番にサイコロを振って、出た目の数の話題について話す対話活動である。初回の話題は、「①好きな食べ物②おすすめのテレビ番組・映画・動画③好き

表1【質問紙調査の内容】

- A 友達と話したり、文を書いたりするときに、言葉を選ぶようにしている。
- B 自分の考えを、正しく、考えた通りに、人に伝えることができる。
- C 友達と意見を交流するのは楽しい。
- D 友達の意見を聞いて自分の考えが変わることがある。
- E 先生からほめられたり、コメントをもらったりすると、学習をがんばろうと思う。
- F 友達からほめられたり、コメントをもらったりすると、学習をがんばろうと思う。
- G 自分で立てた問いを解決していく学習は楽しい。
- H 国語が好きである。
- I 本を読むことで、使う言葉が増えると思う。
- J 新聞を読むことで、使う言葉が増えると思う。

な歌手やタレント④好きな本や漫画⑤好きな動物⑥学校の中で好きな場所」とした。どうしても思いつかない場合はサイコロを再度振ってよいとしたため、何も話せないという児童はいなかったが、声はとても小さかった。2回目以降は、毎回の授業の振り返りをノートに書く際に、リクエストもあれば書くように児童に伝え、その中から話題を決めるようにした。

#### 5-2-2. 言語活動による語彙の獲得

テーマを提示し、一番ふさわしい言葉は何か、辞書を引いて見付けるゲームを実施した。例えば「あ」から始まる「うれしい言葉」というテーマであれば、辞書で「あ」行を引き、辞書全体から「うれしい」というテーマに合う言葉を選ぶ。各自言葉を選んだら、それを選んだ理由も含めて3人組で交流した。児童の好奇心を刺激し、言葉の意味や使い方を学びながら、言語への興味を引き出すことができた。児童から「もっと時間が欲しい」と声上がるほど夢中になる様子が見られた。

また、オノマトペとは何か、起源や種類・活用される場面・使用例などを提示して確認した上でオノマトペゲームを行った。ゲームの内容は、例えば、お題が「うさぎ」であった場合、「うさぎ」を連想させるオノマトペ「ふわふわ」「もこもこ」「ピョンピョン」等を行い、「うさぎ」と答えられたら1点獲得となる。時間で区切り、グループで何点取ることができたかを全体で共有した。

#### 5-3. 宮沢賢治の独特な表現方法に親しみ、作品の世界を捉えるための読書活動

「アニメーション作戦3『いつ?どこで?』(『注文の多い料理店』にて)」は、『扉バラバラ事件』とタイトルを付けて実施した。宮沢賢治の作品『注文の多い料理店』を2人に1冊用意し、自分たちでページをめくりながら筆者の読み聞かせが聞けるようにした。本作品

には、客に向けた指示が書かれた扉が 13 枚も出てくる。その扉の絵を順番をバラバラにした状態で児童に渡し、グループで話し合って物語に登場した順番に並べた。この活動は、宮沢賢治の作品に親しむこと、読んだ内容を理解すること、記憶力を鍛えること、時間と内容を明確に捉えることを目的として行った。

「宮沢賢治ブックトーク」は、上記のアニメーションと合わせて 1 時間 (45 分間) で実施した。実習校の学校図書館にある宮沢賢治の本を学校司書と連携して 50 冊以上用意し、その内 10 作品の表紙を見せながら、あらすじや執筆当時の賢治の様子等を、簡単に紹介した。その後、教室や廊下に置いたところ、手に取って読む児童の姿が見られた。

#### 5-4. 読みを深める「問い」づくり

第 2 週は、『やまなし』本文の学習に入り、単元を通して考えたい「問い」をつくった。まずは、児童それぞれの初読の感想を基に、個人の「問い」を立てた。その後、みんなで考えたい内容を精査し、学級の「問い」をつくった。

##### 5-4-1. 「問い」をつくる前提

###### — 『やまなし』という物語の難しさとおもしろさ—

宮沢賢治の作品『やまなし』については、多くの研究があり、数々の謎をはらんでいる。大正十二年十二月二十日に『注文の多い料理店』の序で「あなたのためになるところもあるでせうし、ただそれつきりのところもあるでせうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことだか、わけのわからないところもあるでせうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。」と書いている。このように、賢治自身も自分の作品について分からないことを率直に表明しており、その解釈は一樣でないことを児童に伝えた。また、「難しいと思う部分もあるかもしれないが、誰かと同じ読み方をしなくてもいい。まずは、自分が感じたことや考えたことを大切にしてほしい。」と伝えた上で、問いを立てる活動を促した。

##### 5-4-2. 個人の「問い」

児童自身が書いた初読の感想を基に、「問い」を考えるように伝えた。すると、児童から例を出してほしいと要望があったため、中身については触れずに、どちらの学級にも「なぜ〜だろうか」という形にすると考えやすいと伝えた。それ以外に 1 組には特に何も言わず、2 組は『〇〇とは何だろうか?』という一部を捉えたものではなく、物語全体を通して考えられる問いにするといい。」と伝えた。この助言の意図は二つある。一つ目は、「毎時間一貫した問いを考え続けることで

表 2 個人が立てた問い

1 組の個人が立てた問い	2 組の個人が立てた問い
クラムボンとは、何だろうか。(5)	クラムボンとは何だろうか。(4)
なぜ、クラムボンは殺されたのか。(6)	なぜ、クラムボンは殺されたのか。(1)
なぜ、かにはクラムボンを知っているのか。	なぜ、かには話なのだろうか。
なぜ、かにはクラムボンのことがそこまで気になるのだろうか。	なぜ、宮沢賢治は人でも他の生き物でもなく、かには選んだのか。(2)
なぜ、かに目線で物語を書いたのだろうか。	なぜ、こんなにオノマトベが多いのか。
なぜ、宮沢賢治は、主人公をかにはにしたのだろうか。	なぜ、魚は同じことを繰り返すのだろうか。
なぜ、作者は、たとえをたくさん使ったのだろうか。	あわとは何だろうか。なぜ、おとうさんはこわいところを知っているのか。
なぜ、こんなに比喻表現が多いのだろうか。	なぜ、やまなしをかわせみと勘違いしたのだろうか。
作者は、色の表現により、どんなことを伝えたかったのだろうか。	なぜ、かには親子は、やまなしについていったのだろうか。(2)
川一面のやまなしのにおいは、	なぜ、金剛石という表現をしたのか。
なぜ、やまなし一つでにおいがひろがったのだろうか。	『やまなし』の世界は、どんな世界だろうか。
なぜ、やまなしが落ちてきたのか。	作者は、何を伝えたいのだろうか。
	宮沢賢治は、何を言いたくて、どうしたかったのだろうか。
	なぜ、題名が『やまなし』なのか。

物語を読み深めることが思考を活性化させることにつながるという考えから、一部分を読んで解決できてしまう問いは避けた方がいい」というものである。二つ目は、『やまなし』という作品において多くの人が気になるであろう『クラムボン』の存在を問いにすると、答えを出すのが難しくなる」ことが懸念されたからである。2 学級ともに伝えることも考えたが、自由な発想で問いを立ててほしいという筆者の考えや、それぞれの学級担任と相談した結果、実態に合わせて 1 組には特に何も言わず、2 組は上記の通り伝えることとした。2 組に関しては、ヒントとして与えただけで、必ずしも守るようにと制限したわけではないが、このことが、児童の学習や質問紙調査の結果にも影響を与えていると考えられる (個人の「問い」は表 2 を、質問紙調査の結果は 6. 考察を参照)。

##### 5-4-3. 学級の「問い」

学級の「問い」は、児童の初読の感想に「よくわからなかった」「作者は何を考えているのだろうか」「なぜ、題名が『やまなし』なのか」といったものが多く見られたため、そう書いた理由や考えを児童に聞きながら「宮沢賢治は『やまなし』を通して何を伝えたいのだろうか」とした。結果的に、2 学級とも同じ問いになった。

毎時間、一貫して個人の「問い」と学級の「問い」について考えるようにした。「五月」と「十二月」の情景を対比しながら、宮沢賢治の独特な表現方法を見付け、どんな世界を想像したか、3 人組の対話活動を通して「問い」に関わる部分を読み深め、自分の考えを

表3 質問紙調査結果に基づく事前・事後比較の t 検定分析

	事前M (SD)	事後M (SD)	t 値	p 値
1組	32.7 (3.48)	34.35 (3.38)	-2.317949559	0.031760869
2組	29.70588235 (4.91)	33.23529412 (4.01)	-4.384704571	0.000461677
合計	31.32432432 (4.40)	33.83783784 (3.67)	-4.57962029	0.0000269337

$p < 0.05$

Mは平均値、SDは標準偏差を表す

確立していった。また、考えるための手だてとして、宮沢賢治に関する資料を提示し、紹介した。

#### 5-5. 「問い」続けた中で考えたことを文章にまとめる

第3週は、自分が立てた「問い」に対する答えをまとめ、友達と読み合う時間を設けた。同じ問いを立てた児童や、異なる問いを立てた児童の双方と話ができるように意図して、3人組の編成を行った。学級で立てた「問い」についても、それぞれが出した答えを交流し、自分の考えを確立していった。授業の最後には、単元学習を振り返り、自分の考えがどのように変化したか、作品を読むことを通してどんなことを考えたかを、評論家になったつもりで『『やまなし』の解説文』としてノートに書き、交流した。

### 6. 考察

「意図的な3人組」について、事後の児童への質問紙調査の自由記述には、「いつもは同じ友達としか意見を交流しないので、いい体験だった。」「友達と自分が違う意見の時もあるから学びがあると思った。」「3人組の授業は、やったことがなかったので楽しかった。」「3人組の話合いは、自分の意見を言えたり、友達の意見を聞いたりできたからよかった。」「グループが変わるから、いろんな人と仲良くなったし、意見がたくさんあった。」「いろいろな人と交流し、意見や考えが広がり、なるほどと思った。」「自分は司会をやるのが得意だと分かった。」「苦手な人と同じグループになった時は大変だったけど、前より仲良くなった。」等、肯定的な意見が多く、否定的な意見は見られなかった。

担任からは、「全体の流れを作ることで、普段発表が少ない(苦手な)児童にも発表の機会を創出することができた。」という成果と「3人組だと男女比が同一にならないため、少数側の児童でモチベーションを落とす児童が生まれた。」という課題に関わるコメントを得た。男女の意識も芽生え始める時期で、そのことが3人組の対話活動に影響する部分があったと考えられる。

言語活動については、「サイコロトークがミニゲー

ムって感じて楽しかった。」「サイコロトークやオノマトペゲームを初めてやったので楽しかった。」等の肯定的な意見が見られた。児童にとって、ちょうどいいウォーミングアップになり、その後の対話活動がしやすい雰囲気をつくることにつながったと考えられる。「オノマトペゲーム」は、始めは、なかなかオノマトペが出てこなかったが、教室内に「オノマトペ辞典」等の関連図書を置くと、手に取って読む児童が出て、内容に拮がりが見られた。また、「様子を文章に表す際に、使ってみよう。」「賢治が考えたオノマトペがたくさんつまっていて、想像できた。」と記述する児童もいた。

上記の対話活動を、毎時間代わる代わる取り組むことについて、担任からは、「最初は、ほとんど話合いができなかった児童も対話活動が活発になっていった。アイスブレイクとして、オノマトペゲームやサイコロトークをすることは効果的だった。感想でも対話活動の良さを実感している児童が多かった。また自分だけの読みだけでなく、友達の読みを共有することによって読みが深まったと感じた。」とコメントを得た。

「問い」に関しては、担任から、「児童は自らの問いに向き合い、その答えとなるものを常に考えて学習に取り組む様子が多く見られた。」「問いの内容は、様々なものがあって、それを皆で共有することができたことも、良かった。」とコメントを得た。

今回は、様々なアプローチを行ったため、児童一人一人の質問紙調査(表1参照)の事前事後の点数を繰り返しのあるt検定を用いて分析した(エクセル統計)。(表3参照)有意水準を5%としてt検定を行った結果、1組2組共に平均値が授業前に比べて上昇している。1組のp値(両側)は約0.0318、2組のp値(両側)は約0.00046で、0.05未満であるため、統計的に有意な改善があったことを示している。2組の方が1組よりも変化は大きい。この理由としては、主に二つ考えられる。一つは、筆者は主に実践担当学級を2組とし、1学期から週1回程度訪問し、共に過ごす時間が長かったことにより、筆者とのやり取りに慣れ

ていたということがある。もう一つは、「5-4-2. 個人の『問い』」で書いたように、問いを立てる際に、助言を入れたことで、問いを解決できた児童が多かったということが理由として考えられる。

## 7. 自己評価と総括（成果）

今回の学校臨床実習Ⅲの実践の目的は、「児童自らが『問い』を立て、文学的作品を読み進める中で『言葉のもつよさ』に気付き、『対話活動』を通して思考を活性化させ、自分の考えを整理したりまとめたりする楽しさが味わえるような授業づくり」であった。そこで、学級担任としては、限りある時間の中で、やりたくてもできなかった教材開発を、時間を掛けて、思い付く限り、有効であると考えられるアプローチを行うことにした。どのアプローチが有効であったかを個別に見ることが難しい結果となってしまったが、全てを合わせて行うことで成果があることは、児童の質問紙調査や担任のコメントから分かった。

開発した教材は、今後も活用したいと話があり、実習校に全て置いてきた。また、同僚に共有したところ、活用したと報告があった。他の教員も活用したいと思うような教材を今後も開発していきたい。

「言葉のもつよさ」について、事前事後の質問紙調査を比較すると、目立った変化はないが、「友達と話している時などに、色々交流を深めることができる。」と書いていた児童が「言葉はたくさんあるから、表したいことを詳しく表せるところ」と書き、「相手に分からせることとか楽しく話すこと、勉強して学べることなど様々です。」と書いていた児童が「相手を納得・共感させるよさ。場面を表すことができるよさ」と書く等、内容が具体的に記述の変化が見られた。

また、担任から、実習後に「現在説明的文章の、鳥獣戯画の学習を始めました。『やまなし』での学習形態を継続し、対話活動をしながら学習をしています。子供たちは、自分の考えや読みを積極的に対話をしながら学習に取り組んでいます。」とコメントを得た。本実践でねらったことを成果があると認識され、継承されていること、児童の取り組みも続いているという報告が届いた。

## 8. 今後の実践と課題

「言葉のもつよさ」について、事前事後両方に無回答や「わからない」と書いた児童が数名いた。その中に、授業時の振り返りで、言葉を選んで文章を書く様子が見られ、毎回フィードバック（ノートにコメント）

をしていたが、「言葉のもつよさ」として認識するところまでいかなかった例もあった。児童により、価値付けの仕方を工夫する余地があると考えられる。

また、質問紙調査の設問Gについて、「問いを通して『やまなし』の表現に注目することができた。」「問いを立てることで自分と同じ考えの人や違う考えの人のことが分かる。」「作者の考えを問いにして、自分はどうしてこの表現を使ったのか考えた。これからも生かしたい。」「問いは、難しくて解けなかったけど、楽しかった。」「ずっとモヤモヤしているのが解けてスッキリした。」等、約89%の児童は問いを立てて解決していく学習に肯定的であった。一方で否定的な児童も約11%いた。その児童の自由記述を見ると、「問いを解決できなかった。」「問いを解決するのは難しかった。」「クラムボンが分からなかった。」とあった。

今回の単元学習の目標は、「◎文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる。（思C（1）オ）○比喩や反復などの表現の工夫に気付くことができる。（知（1）ク）○人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。」である。その目標が達成できている児童も、問いが解決できないと、問いを立てて解決していく学習が楽しいとは感じないということが分かった。肯定的な自由記述の中に「問いを立てるとその問いが解決されるときに、すごく気持ちがよかった。」と書いた児童がいた。モヤモヤが晴れるのは気持ちよく、解決してスッキリすることが絶対であるとしている場合、問いが解決できなかった児童にとって今回の学習活動は辛いものになった可能性がある。

しかし、「生涯にわたって読書に親しむ素地をつくる」という観点から考えたときに、「スッキリする」ということは果たして必須であろうか。読書は、疑似体験ができたり、他人の思考や感情を知ることができたりと、人間が成長する上で大きな役割を果たす。読書は楽しい場合が多いが、必ずしもスッキリするというだけではなく、モヤモヤが残ったり、予想外の展開に気持ちがついていかなかったり、読んでみたものの、何も得るものがなかったと思うこともある。そういったことも含めて読書に親しむということだと考える。そのため、児童の否定的な自由記述も意味のあることだと考える。ただ、「成功体験を積み、また問いを立てた学習に取り組みたいと思える活動」になった方が、良いのではないかという懸念もある。この件に関しては、今後も追究していきたい。